

地域福祉と福祉教育

Regional Welfare and Welfare Education

佐藤 完
Tamotsu Satou

(要約)

学校での学びは、教科目の学習が中心となっている一方で教科目外の学びは学校で行われる行事等々にみることが出来る。本来は、学校は地域の中にあるのであり、学校があって地域があるのではない。地域の中にある学校が地域の中で学びの場が存在する。そこに住まう子ども達は、大人の佇まいを通して地域の文化や芸能。技能が伝承され地域文化のありようを知り、地域の文化が次の世代に伝承される場が存在する。地域に住まう大人達とのかかわりの中で、学校という校地内で知り得る学びとは違った経験を通して大人になることの意味を内在化する場である。

(キーワード)

小地域福祉活動、福祉教育、共同体の学び

はじめに

平成20年よりかかわっている津市河芸町における地域福祉活動（サロン活動）を福祉教育の視点で考える。本実践の経過は、本紀要29号（平成23年3月発行）に記した。この地域でも近所付き合いや自治会活動に消極的な人の集まりの中で孤独死等々が生じている。本地域は、2ヶ所の新興住宅地、県営住宅からなる地域である。新興住宅地は、高齢化率で見ると36.7%（平成23年10月現在）と3.1%（平成23年10月現在）であり、15歳未満人口の割合は、11.0%、36.7%の2地域から構成されている。高齢化率3.1%、15歳未満人口の割合36.7%の地区では子育て支援が最大の課題で有り、高齢化率38.7%、15歳未満人口の割合は、11.0%の地域では、高齢者世帯でもあり独居高齢者等の福祉課題等がある。県営住宅も含め孤独死や認知症にともなう徘徊や老

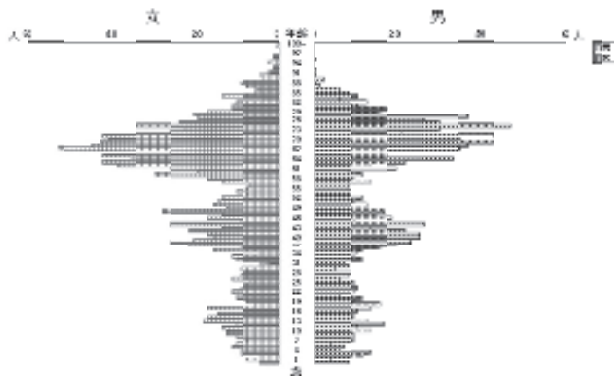


図-1 千里ヶ丘地区人口ピラミッド（平成23年10月31日）

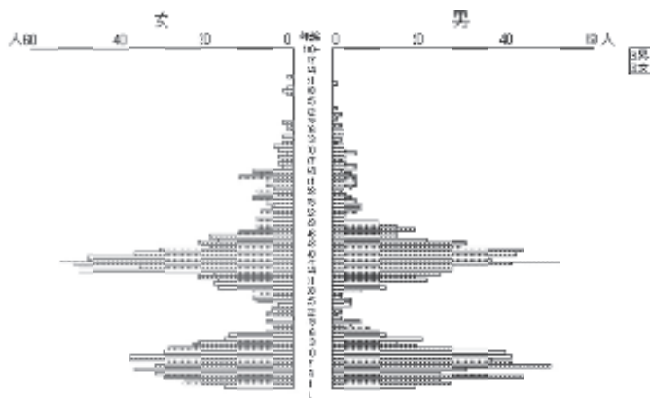


図-2 杜の街人口ピラミッド（平成23年10月31日）

後を憂い介護心中と思われる事案が生じている中で地域住民の手で生まれたサロン活動である。このままでは、安心・安全・安寧地域ではなくなる。個人の問題ではなく地域の問題としてサロン活動が生まれた。(本紀要 29 号を参照)

地域住民の大人の手で始められた活動を概観すると大人の佇まいを将来この地域に住まうであろう子ども達に紡がれる活動にする必要があった。当初は、小学校の父母に如何にかかわって頂くかを思考し同区内のある小学校とのかかわりを模索した。小学校の父母や教職員に本活動の趣旨を理解して頂く機会から始めた。同校において平成 22 年 2 月に同区青少年健全育成者会議「ちさトーク」が実施された時に、参加した父母より「うちの子は、“きっさ わらい”がある日は、自分で起きていそいそと身支度を調べて出かける。帰ってくると“きっさ わらい”であったことを一杯話してくれる。普段の学校がある日は、超さなければならないが“きっさ わらい”のある日は違う。」と話され“きっさ わらい”に何があるのか気になっていた。“きっさ わらい”の中で地域住民のネットワーク作り(地域の方々は、クモの巣作りと呼んでいる)とは違った、小学生における福祉教育の場となっていることを確信した。平成 22 年 8 月に校区内にある小学校教員おける夏期研修の際にかかわり“きっさ わらい”についての実践とそこに潜む意義について説明をした。

福祉教育は、小学校区に確かに存在する「学びの場」であり、そこで出会う人から生活習慣や地域の文化で伝承を通して郷土のある姿を学び取っている場である。高度成長期以後、祖父母と同居することが事が喪失し、住宅の耐震化に伴い紙で仕切られた間取りは限られ家族の気配を感じる事が少ない住宅と化した。“きっさ わらい”が行われた際に、県営住宅のある棟の方々が、自らの住む棟の周辺の環境整備を実施した。その後、歩道に面した処に水仙を植えた事を聞いた。学生と共に出向くと綺麗にされ水仙が植えてあった。本学科に声を掛け植えられた水仙の間にチューリップを植えることが提案され植えることにした。年末の“きっさ わらい”の後で学生と何時も“きっさ わらい”を手伝ってくれる小学生を巻き込んでチューリップの球根を植えた。小学生は、小学校という校地の中でチューリップや朝顔等々を植えて観察するであろうが、校地外には目を向けることはあるのだろうか。今“きっさ わらい”と言う場で小学生自身が自分の住む地域に目を向けている。この機会を通して福祉教育の視点で本実践を概観することとした。

“きっさ わらい”の場での福祉教育

本実践のキーワードは、攻守交代である。老いも若きももてなす側の人であり、もてなされる側の人でもある。“きっさ わらい”に来られる方が、三号店“キッサ つどい”ではもてなす側にまわって調理を担当しサロンを支えている。地域の学びは多様であるはずである。“きっさ わらい”の受け付けは、本学科の学生の役割であったが、短大生から小学生の役割に移っている。小学生が、配膳のウエイトレスを行っている。



図-3 “きっさ わらい”入り口のポスター

小学生が最初に配膳された時の反省会では、サロンに来られた方の注文に合わせて配膳をしてくれるのは良いが、食べ終わると直ぐにお膳を下げる。この場に来る方は食べるのが主ではなく人と人がお話しする機会が主であるので下げるのはボランティアスタッフに任された。それでも小学生は生き生きとしてウエイトレスやウエイターにかかわってくれる。

サロンの欠点である「来ない人をどうするか？」をある時にどうしたら良いかと問われ、来ないのであればこちらから出向こう。いわゆる「出前」の実践である。サロンが開催されている時に、短大生が作るリピーターを増やす意図で考案された次の月を意識した「手作りのお土産」を持参し。県営住宅に出向くことである。エゴマップ作成のために県営住宅を戸別訪問すると、玄関や敷居にお土産が飾られていた。子ども達が尋ねてくれるのは楽しみだと話されていた。子ども達も社協職員や短大生徒とともに出前に出向き玄関等々に飾られているお土産を見て喜びを感じているはずである。学校が得意とする学習に対する評価ではなく、小学生もかかわったお土産あることに生活技術的な評価を小学生自身が見いだすのであろう。

クラブ活動（特別活動）かかわり

平成23年度より、小学校と本学科わらいグループとのかかわりが始まった。“きっさ わらい”で渡すお土産作りに小学生と一緒に作る活動を開始した。“きっさ わらい”に参加する小学生のもう一つの取り組みである。

短大生が渡すお土産は、翌月の行事を意識したお土産を作成している。2月には、3月を意識しておひな様を作った。11月に実施されるお土産は、12月を意識し、ペットボトルに入れた“松ぼっくり（北アメリカ原産のテーダ松）”をクリスマスツリーに見立てた。これは大枠の構想を短大生が考えだし、小学校で子ども達にクリスマスツリーらしく飾り付けを共にする。以前は、短大生が作ったお土産を受け付けの小学生が来られた方に渡すのであるが、受け付けを済ませるとお土産を渡す。短大生は、翌月渡すお土産をインターネットや歳時記等々を紐解きお土産を構想するのである。その後プロトタイプを作って見せに来る。学生の想いを大切にすべくだめ出しをすることはしない。若干の修正を提示するが決めるのは学生自身であるので修正案を踏まえたオリジナルを創り出してくれる。ただ、歳時記とお土産を結びつけることはなかなか難しい作業のようである。条件があるとすれば、昨年（前回）と同じモノは創らないことと渡す相手をよく考え安価なモノを創り出すことである。プロトタイプができ教員側の了解が得られれば材料を調達し、作成作業にあたる。時には、1年生や周りの学生も巻き込んだ作業となる時もある。3年目の本年は、先輩が創り出したモノとは違ったモノを創り出すべく工夫を重ねているが故にアイデアが浮かばず苦戦することも多々ある。次回に何を作り出すか学生なりの産みの苦しみを感じ、開催日に合わせるべく遅い時間まで根気よく時計とカレンダーを気にしながら作成に当たっている。

短大生は、創り出すプロセスを内在しているので来られた方に渡す渡し方に、自分達の想いを重ねて

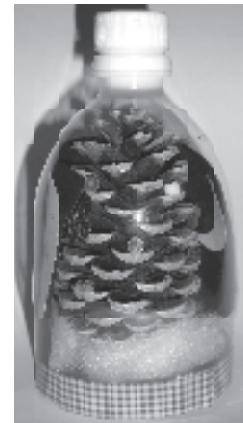


図-4 11月のお土産
松ぼっくりの
クリスマスツリー

渡している。一方、小学生は、一連の創作、作成にかかわっていないので、単にお土産を渡す行為だけのきわめて単調な行為のように見受けられた。受け付けで、来られた方にお土産を渡す場での佇まいが明らかに違っている。若干であるにせよ作成にかかわったモノが手渡せる喜びがあるのであろう。出前に行けば前回渡されたモノが玄関に飾ってあれば、自分達の想いが届いていることをしっかりと子ども達に内在しているはずである。当然そこから表出される行為は単なる一連の作業（ルーチング業務）とは違って来るのは当然で有り、その積み上げにも確かな學びが存在するはずである。子ども達からすれば、短大生は7～8年程の年齢差で有りお姉さん役を演じ次世代を担う担い手とのかかわりを双方向に感じ取るはずである。此処にも世代間の攻守交代があり、人と人のかかわりに双方向の関係性を短大生も小学生も内在されていくことに意味があるのである。

緘黙するAと卒業生とのかかわり

本学科を卒業して愛知県内の福祉大学に3年次編入した卒業生は、今でも都合がつけば“きっさ わらい”に顔を出す。顔を出すのは、一期生だけではなく四期生までの“きっさ わらい”にかかわった卒業生は顔を出してくれる。地域の方々にはおなじみ顔ぶれであり何時もと変わらない普段の“きっさ わらい”の対応である。

卒業生Aとのエピソード

昨年冬の頃だった。小学生達が“きっさ わらい”に参加し始め、とても、賑やかな雰囲気の中でとても、個性的な小学生に出会った。オモチャの手錠をかけられたのがとても印象に残っている。他の小学生たちが、様々なグループを作って、“きっさ わらい”に参加している中、Bは1人だった。自分から同じ小学生と関わらない。どちらかと言うと短大生とのかかわりが多かった。

3月3日に小学校で行われたがおクラブに参加したときも、1人でいたのがBだった。「えがおクラブ」では、地域の「じいちゃん」「ばあちゃん」に、マンツーマンで小学生がつく指導形態だったが、Bは1人だった。Bが1人だったので、一緒に各出し物（折り紙コーナーとか）を廻ったことがBとのかかわりの始めである。

4月24日に行われた“きっさ わらい”で、より一層かかわりが深くなった。Bが一人で、モーニングを食べている姿を見て、「ほっとけない精神」が私の中に働いた。その時にBに「“きっさ わらい”楽しい？」と聞いた。Bは「楽しいよ！」って言った。「なんで楽しいの？」って聞くとBは「あなたたちがいるからだよ!」と答えた。この一言に私は、Bに自分の役割を教えてもらった。“きっさ わらい”の反省会では、「その日にかかわった皆さんから感想を一言いうことが反省会の約束事である。」と言われるととても嫌そうな顔をするBだった。「絶対に言わなきゃダメなの?」「何を言えればいいかわかんない」とも焦っている様子であった。焦っている彼に対して私は、何も考えずに「Bちゃんの思ったことを、言えればいいんやよ～」って言った。「今日は、色々あったらう?」Bのわらいでの半日を思い出してくれたらいいなと声をかけた。Bの番がくるまでBは、「どうしよ～!」と、何度も言っていた!本当に困っている事わかったから、なんとかしたいと私は思った。「Bちゃんなら、できる!」

と言ったように思う。Bの番が回ってきて緊張しているBの戸惑いが伝わってきた。そのときは、Bの学校生活のことなんて、知らなかったから、普通に緊張しているだけやと思った。でも、何か違うと感じたので横から「小学校名と自分の名前!」「今日、一番楽しかったこと!」って言ってしまった。自然と出た言葉だったように思う。そして、Bは「小学校から来た、Bだ」って言ってくれた。その一言の後ハイタッチした。スポーツをしている時にナイスプレーをしたときに仲間と喜ぶときに「ハイタッチ」する。あの時のハイタッチも、自然と手が出たのだが、「頑張ったじゃん!」「言えたじゃん!」って言う私の気持ちと「頑張ったよ!」「言えたよ!」っていうBとの双方向の気持ちが自然とハイタッチになったと思う。ハイタッチのあと、Bと話をしながら反省会を過ごしたけど、Bは、何かどことなく嬉しそうだった。反省会が終わってから小学生の女の子達にBと一緒に「あんたらうるさい」と本気で怒られた。

しかし、4年生の時に担任を勤めた先生は、彼の発言に驚いていた。今までどのように支援しても黙したままのBが、小学校の教室とは違った雰囲気の中で堂々と発言したことに驚いていた。

その時期に“きっさ わらい”で話題になっていたのが「小学生の男の子の役割は何なのか?」であった。何も思いつかなかったのだが、Bの家の近くに住んで居る「じっちゃん・ばっちゃんを、“きっさ わらい”に連れてきて」と話した。結果的には、1人ではまだ早かったようだ。しかし、豪雨の中行われた“きっさ わらい”では、雨でびしょびしょになりながらも、出前に参加するBの姿が見られた。Bが出前に参加してくれることによって出前の雰囲気が変わったことは紛れのない事実だ。今では、出前の際にKさんの家と一緒に邪魔もするようになったし、“きっさ わらい”の反省会でも、発言できるようになったそうだ。

わらいの活動を通して小学生同士のかかわりも増えてきたように感じる。学校では、緘黙するBが“きっさ わらい”で発言できたのには、“きっさ わらい”にかかわる大人達や学生の佇まいの中で「B、頑張れ!」と応援したからだと思う。“きっさ わらい”の場でもわかるように雰囲気作りが大切だと感じた。その後の“きっさ わらい”の反省会で堂々と発言する姿を同校の学年外の先生は、みてさらに驚いたようだ。

上記は卒業生A(大学生)と小学生Bのエピソードであるが、卒業生Aと小学生Bとの間で福祉教育の学びが可視化できるエピソードである。Aが、“きっさ わらい”に参加したBが気に入り、関心を持った。Bに自分の存在を明らかにされるのであった。社会福祉を改めて学学生が、福祉課題に対して「ほっとけない精神」を持ち出すのであるが、学生がBの有する「ほっとけない精神」に自分の存在を気付かされている。“きっさ わらい”があって地域があるのではなく地域があってそこに“きっさ わらい”ある。本実践の当初のかかわりは、サロン活動は手立てであって、サロンをすることが目的ではない。サロンを地域に創り出すのではなく、地域にサロンを創り出して安全・安心・安寧の地域を創設する事への手段であると話し続けてきた。サロンを支援する支部社協(伊藤淳・小川志朗)と短大の佐藤は、カーナビのCPUである。車を運転し安心・安全・安寧の街を創り出そうとする住民がドライバーである。本来は、直進すべきであってもドライバーが右折したければ右折させる。休憩を入れたい

ときは入れてもらう。あくまでもかかわる住民の発意を大切にされた実践と位置づけてきた。もてなす側ともてなされる側は常に攻守交代であり、双方向のかかわりであり、主体と従体の入れ替わりを可視化し、そこに存在する私と貴方の関係に意味がある関係性があることに気付くことが大事である。

Bは、反省会で「C小学校から来た、Bである」と話した事の持つ意味は大きな意味ある発言でありBに取ってはとても勇気を要した一言であったと推察する。学校の中では教員があれこれ支援しても教室や校地内という場の中では一言も発しなかった。Bが普段の生活の中では何ら接点のない大人達の中で話したことはとても意味深いことであろう。このことはBにとって学習能力を評価される場ではなく生活技術能力を自らが問う“きっさ わらい”の大きな意味を持つのである。ハイタッチは、双方方向の関係性の中で世代を超えて了解された瞬間（鯨岡俊のいう通底された関係）であろう。

又、“きっさ わらい”に来られる方はお客様ではない。大阪から転居して、一度大阪に戻るが再びこの地区に戻った方がいる。“きっさ わらい”では、招かれる側であるが、“キッサ つどい”の運営スタッフの一員である。大きな通りを渡るとき交通整理をボランティアでしてくださる。その方は、「戦争を体験した世代が少なくなっている」「学徒動員した人たちもいる」と話し始めた方との楽しい時間が始まった。その方は大阪に住んでいて、終戦までの1年1ヶ月は、石川県に集団疎開した。その方は、三川に疎開していた。「美川憲一の町、三川だよ、字は違うけどね。日本海まで10分くらいの所でいい処だよ。疎開するまで全く泳げなかったのに2日で泳げるようになった。今の子はスイミング教室にわざわざ通つとるけど、そんなことする必要はない」等と軽快に話しが弾んだ。

昭和19年に疎開し、20年に終戦、学校教育は6・3・3制になった。昭和21年に中学に入学、その方は中学一年生から野球のレギュラーとなり3年間センターを守っていたという。自分達が6・3・3制になった初年度であったため、3年間試合に出続けやりたい放題だったと、とても楽しそうに、懐かしそうに、そして誇らしげにお話してくださった。中学は野球部、高校は吹奏楽をやっていたといわれた。その方の口から次々と飛び出してくる思い出話に、思わず「多才ですね」と言わずにはいられなかった。私にとっては想像でしかないが終戦直後の時代に、野球を楽しみ、高校は吹奏楽を楽しんでみえたとは信じられない、その方は普通に話されていたが、この方はただ者ではないと感じた。そしてなおも軽快な口調で、「ジャズが好きで、大阪南のジャズ喫茶もよう通ったよ」と言う。そこでジャズという言葉に敏感に反応してしまった私が出た。「実は最近何気にもジャズを聴いています。ジャズ喫茶にも一度行ってみたいと思っているんです。」とジャズの話にくいついた。「へー何聴くの？モダン？スイング？」と尋ねられたがよくわからない。曲は聴いたら思い出すかもしれないと言うと即座に拍子を取りながら歌ってくれた。上手い！シンガーの名前も曲の名前もわからない私を前に次々と口ずさんでくれた。シンガーも曲名もみな横文字の世界のことだが戦前の生まれのこの男性はとても楽しそうに口ずさんでいた。こんなにたくさんの豊かな生活をされてきた方なのだと感激した。その方にお勧めのジャズの曲を教えていただいた。早速買い求めたいと思う。その方が大好きな曲を私も感じてみたいと思う。大阪では難波、心斎橋や南はその方が会社の休みによく通っていた場所だという。本当に楽しそうに話しをしてくれた。その方が暮らした大阪、辛かったことより楽しかったことが多かったのでしょうか。私も少しだけその方の生きてきた時代と一緒にいたかのような錯覚を受けるほどとても楽しい時間を過

ごすことができた。来られた方は、お客さんではなくそれぞれのライフステージをもたれたタレントである。その場の応答に人と人のかかわりが確かに存在する。

小学生が、出前に出かける時に誰が行くか話し合っていた。当初は、「ジャンケンで決めよう」と言っていたが、「私が残るから行って」と行きたくてたまらない子に譲った。次回は、行った子は「この前は私が行ったから、今度は誰か行って」と譲るであろう。小学生同士の視線で相互に委ねる事の意味を理解していくことになる。小学生は、視覚障害者の方をお迎えに行くガイドヘルプを行ってくれる。従来は短大生の役割であったが短大生も後ろから小学生をも見守ってのガイドヘルプである。その方との送迎の道中で交わされる言葉は、校地では得られない風景が描き出されている。“きっさ わらい”の反省会では、ガイドヘルプを通して感じ得た事を小学校生の言葉で一生懸命に発表する。ハンドマッサージを行っている短大生は、「あんたが来るのを待ってたのさ」とハンドマッサージを受けるべく来られた地域の方々は楽しみにしている。ハンドマッサージも近い将来には小学生の役割の一つになるかもしれない。

地域の中にある学校

子どもが大人になることは、学校という校地も必要であることは疑う余地はない。しかし、本実践に見られる地域の中に学校があることを意識した「学び」も考える必要性がある。佐藤学は「共同体の学び」を提唱し、全国の公立小中学校を巡回し指導に当たっている佐藤雅彰にいわせれば、福祉教育は第一の教育であり、第二が学校の教育であった。今は第一も第二も学校の役割と化し、校地内での「学び」に終始している。本地域での地域福祉活動は、校地外に存在する福祉教育を可視化し意識化しなければならない事を物語っている。佐藤雅彰は、「第一の「学び」が、高度成長以後に喪失又は脆弱化している。高度成長以前の学校に見られた風景には、第一の「学び」が土台にあって学校教育が積み重ねられ、第二の「学び」が成立していたはずであった。」と述べた。改めて福祉教育の場で学ぶ児童・生徒・学生に確かなキャリアデザインを自らが描き出して、学年が上がると共に学びの彩りを与へ豊かにしていくことが可能である。

“きっさ わらい”は、単なるサロンではなく、招く側、招かれる側、運営スタッフ間の中に安心・安全・安寧の地域を紡ぎ出そうとする人と人のかかわりが高齢者から幼子の間で作られ出されている。このかかわりが、安心・安全・安寧の町作りに大きな意味を持つのであろう。社協職員を含め本実践にかかわる側は、かかわる人たちの間で何が生まれ、何が失われているのかを冷静に見極める必要がある。地域に住まう方ができることをボランティア精神でかかわってくるタレントさん探しも必要であろう。本年11月末の“きっさ わらい”で焼き芋を計画した時、別の地区の方が朝から初殻を持参して作り方を伝授してくれた。何もかもを地域住民や地区社協が担うのではなく近隣の社会資源を有効に利用することも支援する側に求められる。

肝要なことは、人の佇まいを持って人と人がかかわることであり、ベクトルのような力と方向をもったかかわりではない。話される言葉が相手の心情に深く内在化すると同時に、話す私の中にも相手の存在が内在化されるかかわりを感じ得る自分の存在に気づくことも必要である。鯨岡俊は、子どもと大人

の「共に生きる」関係は、お互いに主体であるもの同士が相手を主体として受け止める関係であると述べている。これこそが地域福祉活動に潜む福祉教育のダイナミックな関係である。

参考文献

- (1) 地域福祉のこころ 阿部志朗 2004年6月刊 コイノニア社
- (2) 社会福祉の思想と実践 阿部志朗 2011年11月刊 中央法規出版
- (3) 人間の関係 五木寛之 2007年11月刊 (株)ポプラ社
- (4) 自己変容という物語 矢野智司 2009年5月刊 (株)金子書房
- (5) 原始的コミュニケーションの諸相 鯨岡俊 2001年3月刊 ミネルヴァ書房
- (6) ひとがひとをわかるということ 鯨岡俊 2010年6月刊 ミネルヴァ書房
- (7) エピソード記述入門 鯨岡俊 2010年3月刊 東京大学出版会
- (8) <ケアの人間学>入門 浜渦辰志二 2005年11月刊 知泉書館
- (9) 子どもの想像力と創造 ヴィゴツキー著 2005年3月刊 新読書社
- (10) タテ社会の力学 中根千枝 2001年11月刊 講談社現代新書
- (11) 街場の教育論 内田樹 2008年11月刊 (株)ミシマ社
- (12) おせっかい教育論 鷺田清一、釈徹宗、内田樹、平松邦夫 2010年11月刊 図書印刷
- (13) 探求 I 柄谷行人 2010年12月刊 (株)講談社学術文庫
- (14) 居場所の社会学 阿部真大 2011年10月刊 日本経済新聞社